

出題のねらい

㊦は、乾ルカの小説『水底(みなそこ)のスピカ』から出題しました。小説を読むことは、共感性・創造性を豊かにします。登場人物の状況を把握し、心情を読み取ることによって、読解力・洞察力を高めることができます。とりあげたのは、百人一首部に所属する高校三年生、和奈・更紗・美令が文化祭の展示を通して、自身をみつめ、成長していくさまを捉えた場面でした。三人それぞれの心情や未来への思いを、主に和奈の視点から、和歌の展示に関わる描写をもとに読み取る問題です。

㊧は、江戸時代に書かれた、尾崎雅嘉の『百人一首一夕話(ひやくにんいっしゅひとよがたり)』の「僧正遍昭」から出題しました。僧正遍昭は、俗名は良峰宗貞(よしみねのむねさだ)、桓武天皇の孫という高貴な血筋で、仕えていた仁明天皇が亡くなったのを機に出家します。そして、㊦の小説にも出てきた「天つ風」の和歌など、素晴らしい和歌を詠みながら、仏の道を進むのですが、俗世に居た頃に、素晴らしい出会いをしたという説話から出題しました。重要古文単語などの知識を使って、内容を把握し、現代語訳や内容説明ができる表現力を身につけているかを問いました。

㊨

【解答】(50点)

問一	a 鼓膜	b 崩	c たけ	d 懸念	
	e もうとう				(2点×5)
問二	I イ	II ウ	III エ	IV ア	(2点×4)
問三	X ウ	Y ア			(2点×2)
問四	イ				(3点)
問五	(最初) 鈴木と～	(最後) いた。			(4点)
問六	(1) A 存在感のある	B いつかまた、海と仲良くなれたらと願っています。	C トラウマ	D 清々しい笑顔	(3点×4)
	(2) 東日本大震災の際、多賀城市で車を運転中の更紗の父が、津波により被災したこと。				(6点)
	(3) 今のつまらない自分を変えたい望み				(3点)

【解説】

問一 漢字の書き取りと読みの問題です。読みはよくできていました。一方、書き取りは、「鼓膜」の「鼓」が「殻」となっている等、ケアレスミスが目立ちました。

問二 選択肢付きで、空欄に適切な語句を補充する問題です。文脈を把握する力と、慣用句の意味を知識として持っていることが正答につながります。

問三 接続詞を補充する問題です。前後の文と文がどのような関係になっているのかを把握します。Xの前後の文は逆接の関係になっています。Yの直前の文は、Yの直後の文の理由になっています。これらをヒントに、それぞれに最適な接続詞を選びます。

問四 選択肢付きの心情説明問題です。和奈には藤宮先生の目が「悲しみを帯びたように」見えました。この藤宮先生の様子から和奈が読み取った感情を理解するために、前後の文脈を把握します。藤宮先生は、自身の意見と和奈の意見とが異なり、自身の意見を和奈が受け入れないことを予測した上で、「でも一応言っておくけれど」と前置きをしながら、高校もいじめは発生する可能性を示唆しました。この発言から、更紗がいじめの対象になることを危惧する先生の心情を読み取ります。Iの「いじめの対象になることを危惧した無力感」が正解です。

問五 内容説明問題です。「鈴木と田中は紫式部と清少納言なんだな」という発言への応答が「うちら、相談して合わせたんだよね」でしたので、これをヒントに、鈴木と田中の発表について具体的に記されている部分を抜き出します。字数が設定されていますので、条件の字数に合わせて最も適当な部分を抜き出すことが大切です。

問六 内容説明問題及び心情説明問題です。掲載の説明文では、百人一首の中から各人が選んだ和歌を手がかりに、和奈・更紗・美令それぞれの心情を、和奈がどのように捉えているかを要約しました。(1)は心情説明問題です。和奈・更紗については、選んだ和歌とそれぞれの抱く思いとの関わりを示している問題文の箇所を探します。美令の場合は、更紗の発表に対する反応を読み取ります。字数制限がありますので、字数に合う該当箇所を抜き出して説明する力も問われます。(2)は内容説明問題で、記述問題です。更紗は「末の松山の歌」を選び、その理由を自身の体験と重ねて説明しています。その体験を問題文中の語句を用いながらまとめます。体験の内容を、時や人物、場所等、具体的に抜き出してまとめる力を問う問題です。「東日本大震災」・「多賀城市」・「更紗の父」・「津波による被災」といった要素を入れ、かつ、50字以内にまとめることが重要です。(3)は心情説明問題です。「美令は敗北したというより先を越されたという気分だったのかもしれない。その気持ちは和奈も分か

る。変わりたい、今のつまらない自分を変えたい望みは、和奈の中に捨てきれずあるのだから。」という文章から、三人に共通すると和奈が感じた「思い」を読み取ります。美令は更紗に「先を越され」、和奈も更紗と同じ「望み」を持っています。三人が抱く、未来へ向けた共通の思いとは、「変わりたい、今のつまらない自分を変えたい」という望みです。小説の心情把握は、本人たちの語り以外にも、描かれる情景や表情の説明などからも読み取れるようにしましょう。



【解答】(50点)

問一	a くろうど	b うるわ	c よひとよ	(2点×3)		
問二	① イ	② ウ	③ エ	④ キ	⑤ ク	(2点×5)
問三	オ	(3点)				
問四	ア	(5点)				
問五	オ	(5点)				
問六	宗貞にあるじまうけすべき方もなかりけるにや	(4点)				
問七	あつもの	(4点)				
問八	母の自筆の和歌を見ると、宗貞はたいそう和歌に感動して、蒸し物を引き寄せて食べる。	(10点)				
問九	オ	(3点)				

【解説】

問一 単語の読みの問題です。a「蔵人」は古典世界の役職名です。「くらびと」「くろうと」といった誤答が目立ちました。役職名や衣装名は古典世界を知るためにも、押さえておきたいですね。bは形容詞「麗し」で、現代語でも「うるわしい」という形で残っているため、正解多数でした。逆に、c「夜一夜」の「よひとよ」は「一晚中」の意味で、古典を読んでいるとよく出てくる表現なのですが、身近ではない単語になってしまっているようです。「よひとよ」から音便化して、「よっぴて」などという表現もあります。

問二 助動詞の意味を答える問題です。①の尊敬や②の意志、③の打消はよくできていましたが、④の下に名詞が来る時に婉曲になる「む(ん)」や⑤の使役は難しかったようです。助動詞は古語ですが、二〇数個しかなく、また動詞や形容詞のそばでよく使われているので、味方にして古典を読解したいです。

問三 格助詞「の」の識別の問題です。傍線部Aの「の」は同格、アとウが主格、イとエは現代語でもよく見られる、下の名詞を説明する連体修飾格、オが同格

でした。単語の識別問題は馴れるまでは時間がかかりますが、コツコツと問題を解いていくと、確実に点数が取れますので、苦手意識を持たずに挑戦したいです。

問四 和歌の現代語訳問題です。女は「びいちく」鳴く鶯の鳴き声を「人来(ひとく)」と聞いて和歌を詠んだのですが、「誰と」の部分の解釈が難しかったです。これは、「誰(が来る)と」の意で用いられています。「誰とか待たん」は、「か」が疑問の係助詞ですので、「誰が来ると思って待とうか」という訳になります。

問五 女の行動の理由を説明する理由説明問題です。傍線部の直前の「かやうに荒れたる……侍らんものを」が該当箇所ですから、それを説明したものを選びます。理由説明問題や心情説明問題は、必ず問題文に答えとなる該当箇所があるので、それを見つける内容把握力を身につけましょう。

問六 作者の推測を説明する内容説明問題です。本来、物語に登場しない作者が、主観的推測を述べるために用いるのが「はさみこみ」という挿入句です。これは、事実の前に置かれるという特徴がありますから、今回の該当箇所は「宗貞にあるじまうけすべき方もなかりけるにや」です。誤答としては「女今さらに……」「それより後は絶えず……」など、「はさみこみ」が見つからなかったものが見られました。

問七 別の語句に言い換えた表現を見つける問題です。「あつもの(羹)」とは、現代では「肉や野菜を入れた熱い吸い物」のことをいいます。「あつものに懲りてなますを吹く」といったことわざもあります。故事や成語は現代文でも問われる知識ですので、興味を持って蓄えておきたいものです。

問八 現代語訳の問題です。「これを見るに、いとあはれに覚えて引きよせて食ふ」の「これ」の指示内容は「母の自筆の和歌」です。「和歌」であることが最も大切です。それを宗貞が見て、「あはれに」覚えたのですが、この形容動詞「あはれなり」は「可愛そう」や「気の毒」ではなく、「和歌に感動した」の意です。そして、引き寄せたのはもちろん「母の用意した蒸し物」です。「女を気の毒に思って引き寄せた」という誤訳は、内容把握ができていなくて、残念でした。それにしても、この文章の最後で、桓武天皇の血筋を引き、仁明天皇に仕える高貴な宗貞が後にどれほど美味しいものを口にしても、女の母があの日用意してくれた、庭の若

菜の蒸した物ほどの素晴らしい食べ物に出会ったことがない、などという感想は、人が美味しいと感じるものはどういった物かを考えさせる話ですね。

問九 文学史の問題です。和歌は現代でも根強い人気な上、古典を読む時には類出の教養ですので、「六歌仙」についても、知っておきたいです。

【現代語訳】

遍昭が在俗の時、良峰宗貞とって、仁明天皇にお仕え申し上げ、蔵人頭として常に天皇のお側近くに馴れ申し上げなされて、美男で和歌の達人であった。宗貞はある年の正月十日に、行きたいと思う所があって出て行きなされた途中の道で、五条あたりで雨が降り出したので、しばらく雨宿りをしようと思って、荒れた家の軒にたたずみながら、奥の方をのぞき込みなされると、五間ほどの檜皮葺きの家で、人の姿も見えないので、宗貞はなんとなく門の内に歩み入って見ると、端の間の軒に、梅がたいそう風情ある様子で咲いている木に鶯も鳴いて止まっている。人が居そうにも見えない簾の内から、濃い紫の衣の上に薄い紫の衣を着て、身長もほどよいぐらいの女で髪がたいそう長く見える女が（出てきて）、

蓬が生えて荒れたこの家に鶯が誰かが来るとでも言うように、びいちく鳴くなあ。誰が来るとして私は待とうか。

と独り言で吟じたので、宗貞はこれを聞くと同時にむやみに心が浮ついて、

私がやって来たのだが、こういう時に声を掛けることになれていないので、鶯があなたに告げよと私に教えて鳴くのだ。

と美しい声で返歌を吟じたところ、この女は驚いた様子で、誰もいないと思って恥ずかしい様子を見られてしまったことだよと思っているような顔で、何も言わずに簾の中に入った。宗貞はすぐに縁側に上がって言うには、「どうしてあなたは何もおっしゃらないのだ。雨がひどく降りますから、この雨の止むまではこの縁側にこうして居ましょう」と言うと、簾の内側からこの女の声で、「このように荒れている住まいですから、あなたが雨宿りなされても外の道に居る以上に濡れてつらいとお思になるような事が恥ずかしくございます。まだ初春の空で、寒さが耐えがたいでしょうに」と言って、簾の内から敷物を差し出したので、宗貞はたいそううれしくて、この敷物を引き寄せて座った。

そして、つくづくと辺りを見ると、簾の縁も蝙蝠などがつついたのだろうか、あちらこちら欠けているので、中の調度などがぼんやりと見えるが、昔の栄えていた様子が偲ばれるようで畳などは良い品だけれど古びている。こうしてだんだんと日も暮れたので、宗貞はいつともなく簾の内にすべり入ったところ、この女はさらに奥へ入ろう

とするのを、宗貞は引き留めて、何かと語り続けるので、女は今さらになって恥ずかしいし残念だと思うけれどどうしようもない様子であるが、雨はやはり小止みにもならず一晩中降り明かして、翌日の朝になって少し空が晴れた時に、女はやはり奥の方へ入ろうとするが、宗貞はそれを許さない。あれこれするうちに日も高くなった。この女の母親は、宗貞にごちそうできる方法もなかったのだろうか、供の小舎人童には塩を酒肴にして酒を飲ませ、宗貞には広庭に生えている若菜を摘んで蒸し物というものにして茶碗に盛り、箸としてはこの庭に咲いている梅の花で、満開である梅の枝を折って、その花に母親自身の筆跡で和歌を書き添えて出した。

あなたのために衣の裾を濡らしながら、春の野に出て摘んだ若菜です。

宗貞はこれを見ると、たいそう和歌に感動して、蒸し物を引き寄せて食べるが、女はたいそう恥ずかしく思って寝たまま顔を背けている。宗貞はそっと部屋を出て、供の小舎人童を自宅に走らせて、牛車で様々な食べ物を取り寄せてこの家に残し置いて、「また参ります」と言って別れて帰ったが、それ以後は絶えることなくこの女の所に来訪した。何でも言える友人にこっそりこの事を語ると言って、「たくさんの物を食べたが、やはり五条で食べた若菜の蒸し物の素晴らしかった食事と並ぶものはない」と宗貞は言った。